
巻 頭 言

冷静さを取り戻すための研究

高齢者看護学実習では学生のほとんどが認知症を呈する方を受け持つ。実習初日、学生は対象者にどのように近づくか悩む。どこに位置し、どんな声で、言葉で話しかけるか。自分を恐れないでほしいことを伝えるために身体に触れてみようかとさまざまな仮説を立てながら試み、結果を分析し、次の関わりを模索する。まさに日々の看護実践は研究活動とも言えるかもしれない。

突然怒り出した A さん。学生は「どうしたら良いか…」と悩み、少々怖がっているようにみえた。負の感情をぶつけられたら誰でも困惑するであろう。この学生に限ったことではない。ただ、どうやって乗り切ることが重要であり認知症ケアのおもしろさだと密かに思っていた。学生は A さんの怒りはじめた場面の前後の状況を話し出した。もしかしたら「私の何が悪かったのか先生教えて!」という泣きたい気持ちを込めた報告だったのかもしれない。しかし、ここは泣くところではない。学生には「データをとってみよう」と提案した。「教員とはいえ、何が正解かはわからない。どう関わったらどんな反応があったのかをていねいに記録してください。一緒に考えましょう。」と。その後、学生は時間、表情、言動の記録を詳細にとり、午前と午後の違い、食事摂取量との関係など「もしかしたら」をいくつも見つけ出していった。詳細な観察記録で見えないものが見えてくる。もっと見たくなる。A さんの怒りにおびえた初日が嘘のように学生と A さんとの距離は短くなっていった。今日見出したことが明日も有用とは限らないのが認知症ケアである。しかし、「データ収集と分析」、そして「結果」に意味を見出す「考察」作業が、毎日「初めまして」と自己紹介ではじまる認知症ケアに深みを与えてくれる。A さんは学生を「私をわかろうとしてくれる人。私の味方。」と認識したのか、いつしか学生にしか見せない言動があった。「私のことを覚えていてくれました」と朝一番の学生の笑顔。認知症を持っていても理解し合える。このことを実感したとき「尊厳」という言葉がしみ込むのだろう。非常に重要な看護実践という「研究活動」だったと思う。

昨今、医療・介護制度が変化し「まずはやってみよう」と見切り発車する業務があるのではないだろうか。また、対象が高齢化し家族の形も多様化する中で看護の個別性がますます際立ち、パスやマニュアルでは対応しきれなくなっているのではないだろうか。教育現場も日々伝えなければならないことが多くなる中で、どうやって学生の持っている力を引き出すか試行錯誤しているのではないだろうか。このような時代だからこそ、東邦看護学会誌では「実践報告」も非常に重要視している。事象を様々な視点で見つめ直し、課題に対する突破口を見出す手段のひとつとして東邦看護学会を活用していただきたいと切に願う。

平成 27 年 3 月吉日

東邦看護学会理事長
横 井 郁 子
(高齢者看護学研究室)